

生活・総合の活動や体験を通して育まれる考える力 - 「学びのIn・About・For」と思考力

上越教育大学 木村吉彦

生活科や総合的な学習の場合、学習方法の最大の特徴は「活動や体験を通して」学習が進められる、ということです。ここでは、活動や体験を通すことで、どのような資質・能力の育成が期待できるか、それらの資質能力の中でもとりわけ思考力はどのようにして育成されるのかについて「In・About・For」をヒントに考えてみたいと思います。

1. 学習の流れの象徴としての「In・About・For」

「In・About・For」は、もともとイギリスの環境教育の用語です。

In とは、学習対象となる場所そのもの（例えば森や川）に入り込むことによって、その場所がどういうものであるかを体と諸感覚の全てを使って満喫し、そこでの活動に没頭する活動を象徴しています。学習対象であるその場で、森に枯れた部分があることや川の上流であるにもかかわらず、トレーが足に当たったりして山奥のゴミの存在に気付かされます。このような In の活動では、集中力や感性的な課題発見力の育ちが期待できます。

About とは、In の活動の中で見つけた感性的な課題についてこだわりをもち、その疑問（「どうして所々だけ枯れているの？」「僕たちのゴミはどこに集められているの？」）について解決しようとし、さまざまな調べ学習に取り組む活動を象徴しています。ここでは、知的な課題発見力（酸性雨・ゴミ問題）・課題解決力すなわち情報収集力の育ちが期待できます。この情報収集力とは、実は「考える材料を集める力」を意味します。

For の活動とは、体験を通して得た実感の伴った問題意識に裏付けられ、自分で集めた情報（考える材料）を駆使して、学習対象に対して自分はどのような貢献ができるかを考える活動の象徴です。例えば、「森のために僕は何ができるのだろうか」「きれいな川を取り戻すために、僕は何をしなければならぬのだろうか」などと考えを進めることです。

このように、「課題を見付ける（In） 情報を集める（About） 何ができるか考える（For）」という、体験や活動を通して行われる一連の学習の流れを象徴するものとして「In・About・For」があります。ここで大切なことは、思考力が単独で育成され、発揮されるのではなく、その前提には感性的な課題発見力・知的な課題発見力・情報収集力など、自分で見つけた課題に対してこだわり、様々な方法を駆使して情報を得ようとする意欲が根底にあって初めて、考えるという活動が成り立ち、考える力が育つということです。真の意味の思考力は、活動や体験を通して初めて子ども自身のものとして育っていくと言っても過言ではありません。単なる頭脳（頭の中）だけの問題ではないのです。活動や体験の中での主体的な課題設定があってこそ、思考力が育つと言えるのではないのでしょうか。

2. 子どもの育ちを連続的に見取り、思考力育成につなげるための「In・About・For」

一方、私は、この「In・About・For」を、子どもの発達段階に見合った、その時期に最も

大切にしなければならない活動内容とその発達段階に応じて育てたい資質・能力を象徴するものとしても考えています。幼児期から小学校卒業までを視野に入れ、それぞれの時期に最も大切にしたい活動とそこで育まれる資質・能力を表にしたものを、次の頁に載せました。ここには、子どもの学びや育ちを連続的かつ全人的に捉え、目の前にいる子ども（自分が直接受け持っている子ども）だけでなく、子どもたちのこれまでとこれからを強く意識し、しっかりした見通しをもって子どもの教育に当たることの大切さをも示しています。

＜子どもをトータルに（全人的・捉に）える保育・教育＞			
保育（遊び）	生活科	総合的な学習	
For （～のために）	（～のために）	誰のために＜他	者意識＞
About こだわる	（～について） ・調べる・知る ＜知的好奇心・	何のために＜自	己の生き方＞
In （～の中へ）	・調べる・知る ＜知的好奇心・	追究 うとする 調べ方・学び方＞	の第二段階 ・思考力・判断力 ・行動力
没頭する・夢中にな	・こだ	追究の第一段階 わりを見つける力	
＜自己中心性・直接	る・浸る 経験・体験を通した	・情報収集力	
・集中力	・主体性の育成	学習＞	
幼 児 期（３歳～） ＝「知性の土台」作り	低 学 年 「わたしは が好きです、得意です。」	中 学 年 「わたしは～について知っています」	高 学 年 「わたしは についてこう考えます」
児 童 期 生涯学習論にも応用可			

＜幼児期から児童期にかけての子どもの育ちの見取りとその時々を中心的な教育課題＞

それぞれの時期の特徴と In・About・For

幼児期から低学年：この時期の自己中心性とは、自分にとって身近なものについてはよく学ぶ（よく覚える・よく身に付ける）という特徴をもっています。従って、自分の好きな遊びや自ら選んだ活動に「没頭する体験」が大事です。この体験が集中力を生み、人間としての主体性の源を創ります。また、この時期の諸感覚をフルに使った活動が感覚（感性）的な課題発見力を育てます。幼児や低学年であっても、遊びの対象や遊び相手へのこだわりはありますし、年長児にもなれば、「年少児のために・赤ちゃんのために何ができるか」（お兄さん・お姉さん意識）をもちますので、In を中心としながらも、About・For も意識した保育や学習が必要です。

中学年期：知的好奇心が旺盛になる時期です。この時期の児童は、自分で興味・関心の対象や課題が発見できます。そこでこだわりを学びます。そのこだわりに基づいて、おおいに

調べ学習を設定してください。この時期の子どもたちは、「おもしろそうだから調べよう」「興味があるから知りたい」と考える時期です。ただし、ここで「社会的な問題意識」のレベルを要求するのは、少し無理があるかも知れません。「追究の第一段階」とは、社会問題よりも自分の興味・関心を大事にした追究でいいのではないかと、という意味です。とにかく、情報収集の体験を多くもつことで、考える材料集めの力を養いたい時期です。

高学年期：私は、For（ために）の思考の中に二つの種類の思考力を見出しています。一つは、「誰のために」という他者意識（相手意識）のある思考です。この他者意識のある思考を促すことで社会的な問題意識に裏付けられた学習が可能になります。これが「追究の第二段階」です。もう一つは、「何のために」という自分のやっている活動や学習の意味を問う思考です。これは、「誰のために」も含めて、自己の生き方について考える力につながります。言うまでもなく、この考える力は総合的な学習の究極のねらいとなる思考力です。

さらに言えば、私は、高学年の総合的な学習においては、考えたことをもとにした判断力（「酸性雨を食い止めるために僕は二酸化炭素をなるべく出さないように生活する」）や、行動力＜広い意味の自己表現力と考えてください＞（「近くに移動する時はクルマを出してもらわずに、自転車を使うことにしよう」といった、日常生活に直結する資質・能力も養うように努めなければならない、と考えています。このように、高学年では「thinking for ～」から派生して、「judge」と「do」の力まで育てたいと思います。このことは、先にも述べましたように、思考力というものがそれだけで意味を成すものではなく、自分の生活行動にまで結びついて初めて意味を成すものであることを示しています。これが、活動や体験を通して学習対象とかかわり、思考力を育むことの究極的な意味だと思われます。

このように考えますと、学習の流れにおいても、発達段階に即した学習においても、In の学び（感性と身体を通した体験）があって初めて、課題発見と課題解決への意欲がわき、About・For の学びにつながっていくのだと言えます。上の表に書いた「知性の土台」とは、思考力の土台をも意味しているのです。